

令和三年四月十日発行

皇學館論叢第五十四卷第一号 抜刷

秦恒平『冬祭り』論

―― 虐げられた愛の哀しみの物語 ――

永
栄
啓
伸

秦恒平『冬祭り』論

——虐げられた愛の哀しみの物語——

永 栄 啓 伸

□ 要 旨

京都東山区の鳥辺野はかつて死者を埋葬する場であった。それは生者の空間と死者の空間が接する場であった。むかし、その地域を差配していた安曇家の冬子は蝮指をもち、海人族の名残りらしい耳をもった、異界に通じる人である。宏と恋に落ちるが、宏は冬子が蛇の化身ということを感じて結婚に尻込みして別れる。しかし宏の知らなかったことだが、冬子は二十年前、宏の子を産み、その子法子は二日半で死んでいた。しかし二人は作家となつた宏のまえに幻想としてあらわれる。

本稿では、日常と幻想という重層の構造をもち、幻想のなかで異界の冬子との交歓が可能な宏を描く秦恒平の世界を物語る作者という二重のフィルターをかけた趣向を確認し、そうした構造によつて差別意識の抜けない宏を批判し、また宏も蛇の要素があることを示唆することで宏も虐げられる側に立つことを窺わせる点に注目した。哀しい愛をもとめて出現する冬子の意味を問いながら、身内の論理を再点検しつつ、作家としての背理と幸福を考える作者の意図を考察した。

□ キーワード

秦恒平 冬祭り 冬子再来 蛇の化身 海人族

(1) はじめに

たとえば、五十年まえ、恋する人に電話をした。九州博多のとあるデパートのおもちゃ売り場であった。かつての覺書を見ながら、ふと、いま電話すればその人が出るような錯覺におそわれる。そこで思い切って電話を試してみる。以前と同じように、交換手が出ると、おもちゃ売り場を、と言う。長い待機音が鳴って、おもちゃ売り場につながる。その人の名を告げる。もちろん、そんな人はいるはずもない。もう長く消息のわからない人だ。

ところが安曇冬子はそうした電話に出るのである。その声は、日常と幻想を結ぶ入り口と呼べるかも知れない。夢想は事実が確認されるまで存在し続けるから、「正確に二十年と七カ月話さなかった」(六章)冬子がモスクワから独特のサインを送ってきたり、電話すらかけてくる。冬子は二十年まえに死んでいるのだが、読者に判明するのは物語の半ばであり、前半は「あの、冬子も、昔どおり京都に、東山のふもとと鴨川の東に住みついているなら、マーシャたちになぞらえて思いやすい地霊にいた美少女だった。のに、彼女は今遠くモスクワに住んで、来て、と呼んでいる」(四章)とか、妹順子との会話のなかで「俺は、冬ちゃんが、死んででもしてるのやないか、思ってた」(五章)と語り、冬子の非在を示唆もするのだが、読者はしばらく作家秦恒平とともにソヴィエト訪問を体験することになり、その途中、加賀法子のような日常に潜む幻覺との同伴を余儀なくされる。

この小説は、「東京新聞」「中日新聞」「北海道新聞」「西日本新聞」「河北新報」「神戸新聞」の夕刊に、昭和五十五年五月九日から五十六年二月二十八日まで、二百四十一回にわたって連載された全十六章からなる長編である。のち『冬祭り』(昭和五六・五 講談社)としてまとめられた時、その帯文の後半には「夢中、という言葉が私は好きだ。必

ずしも心せわしい急ぎ脚をそれは意味しない。夢と現実とに境があると、私は幼来あまり信じすぎないよう生きてきた。死と生との境、虚と実との境、眼に見えぬものと見えるものとの境と言いかえてもいい。今度の小説では、人が人として生きるそういう夢中の寂びしみに、しかと手を触れてみた」と記されている。昔にさかのぼるほど、死者と生者、彼岸と此岸の往来が身近なものと考えられていたらしい。幻想と現実の往還のなかでしか語れない冬子と私の愛の物語を企図したことが知れる。

作品の地下になっている訪ソ旅行については、自筆年譜^(注1)によれば、昭和五十三年四月五日に「招かれて加賀乙彦と鎌倉の高橋たか子宅を訪問し、大庭みな子も共に歓談。高橋からソ連作家同盟の招待に一緒に応じないかと誘われる」とあり、同月二十六日には「文芸家協会訪ソ連代表に決まる。宮内寒弥、高橋たか子と三名」とその経緯について記している。つまり作品中K団長と表記される宮内寒弥は、作中でも言及されるように、岡山生まれで、昭和十年「中央高地」で芥川賞候補になった。戸籍上は岡山出身だが「気もちとしては九分九厘、親の勤務先だった樺太、です」(三章)と本文にある。Tと記される高橋たか子は高橋和巳の妻で、『誘惑者』『終りの日々』などを書いた。実際には、昭和五十四年九月六日横浜港から出発、モスクワ、レニングラード、グルジアを経て、同月二十二日成田空港に帰国した。宮内は一九八三年に、高橋は二〇一三年に没したが、発表当時(一九八〇)はともに生存していた。ちなみに、このとき作者は四十三歳、作品中では宏も四十三歳、二つ下の冬子は四十一歳の設定である。

この新聞連載の依頼は訪ソの後であつたらしいが、「昨日今日のことも、すこしまとめて心覚えを書いておきたかった」(四章)とあるように、紀行文かと思えるほどソヴィエト訪問の詳しい記述が続く。むろん、作者の日頃からの圧倒的に綿密な記録癖と記憶力は自筆年譜に明らかだが、——故に日記などには到底書きえなかつた愛や断念がある、とも想像できるのだが——この物語が詳細なメモをもとに書かれたことは容易に推測される。その訪ソの紀行記述の

間に、数々の神話や民話や歴史や過去の京都時代の出来事が浮かびあがって、日常と幻想という二層の構造をつくる仕組みである。

(2) 鳥辺野、安曇(あど)家について

作家秦恒平(本名は当尾宏、母和子は秦姓を名乗ったが失踪したため、当尾家のもらい子となった)は、子ども時代、京都六波羅にある「野尻の叔母」のもとへ習字に通っていた。その息子吉男とは同級、吉男の従妹にあたる冬子は二歳下、さらに三つ下の妹順子らが集っていた。のちに系図に見るが、みんなが野尻の叔母と呼ぶのは安曇家の次女が野尻正男(六道)に嫁いだためである。宏の目に映る冬子は次のようである。「まるい衿の、少女らしい白いブラウスに襷スカートよりすこし明るい紺色のカーデイガンを重ね、冬子は、なにより話し方がはつきりしていた」(一章)。これは「早春」^(注2)に描かれる久慈芳江の描写に似ている。また「此の世」の冒頭にも似た描写がある。当時、女学生がそうした制服を着ていた、というより、作者に宿った特定の面影が共通のイメージとして描かれたように見える。

冬子の自宅は東山区馬町にあり、「馬町の安曇の家が、ほかでもない旧音羽川に架かったその土橋の東と西のわきに在って、とうに無いその黒ずくめのお茶所というのも、かつて冬子の生家で営んでいたと知ったおどろきは深かった」(一章)と記される。これだけではわかりにくい^(注3)が、この一帯は明治末に市電が通るまで、葬列のとき、焼き場へと上る道筋であったことに驚くのだ。

野尻家についても、苗字の由来を「鳥辺野の末、入口、ほどの意味らしい」(一章)と宏は思う。

梅原猛は『京都発見一 地霊鎮魂』^(注3)のなかで次のように記している。

京の都の東、阿弥陀が峰の麓は鳥辺野といわれたが、そこは死者を埋葬する場所であった。(略) 鳥辺野一帯は、めったに人が近付かない死の空間であった。その死の空間と生の空間の接点が六道の辻であり、そこに六道珍皇寺という奇妙な名の寺が建っている。かつてはこの六道の辻に、人は屍を運んで、そこで僧に引導を渡してもらった。そして、そこから鳥辺野に行き、死者をほふ^ふと後をも見ずに急いで逃げ帰ったのである。

珍皇寺は井戸をつかつて閻魔大王のもとへ往来できたという小野篁で有名だが、こうして遺棄された死体を処理する人々を以前は安曇家が差配していたらしい。

習字からの帰り、清閑寺へ案内してくれた冬子が途中で教えてくれる。清水焼の発祥地であること、鳥辺野が「都の人はそこで、野尻や六道の辻で、死者と別れた。屍は野山に住む人手にゆだねた」こと、「この東山区、山から鴨川まで、歴史的には例外なしいうくらい永い永いこと死体棄場やった」(一章) こと、死体の始末をした人々を大事にしなければならないこと、土地にまつわる歴史のこと。つまり登場する人物は歴史的に蔑まれてきた土地に生きる者たちなのである。

作者は「作品の後で」^(注4)で作品の核の部分の語っている。

歴史的な差別問題の根の深みが「何」にあったか。世界的にみても、常に「死者」との関わりにあった。もっと端的に言えば、「死体」と関わる距離の遠いと近いとに、深刻な尺度を置かれがちであった。穢れと畏れ。それが表裏し、死体の処理と祭祠(芸能)とが分業化された。(略)「幻想」という方法をあえて多用したいちばんの

理由は、そういうふうな仕掛けでないと語りきれないほど、「問題」が、危うくも危うく、難儀をきわめていたからである。

(3) 海人(あま)族について

歴史的というとき、作者は安曇家をくわしく述べる。ナホトカに向かうバイカル号のなかで教え子だったという加賀法子に接しながら、指をまげる蝮指について、また「面白いくらい両方とも真中が窪んで見え」る冬子の耳たぶを幻視する。なぜなら、日本を考えると、蛇信仰は避けられず、信仰と習俗、技術や芸能に共感しながら、「晴れ晴れとばかりは生きえなかったそのような人の境涯を哀しむ思いは年々に強く、哀しみの根には安曇冬子がいた」(二章)からだ。法子の穴のあいたように見える耳たぶや蝮指は「安曇、いや今はモスクワの牧田夫人、冬子」にそっくりだった。その冬子に逢うことが目的になった旅なのだが、「冬子とどう逢えるか。今となってそれが、なかなか実感に迫らないただ夢」(三章)と思われていた。

また「ほら、神武天皇のお祖父さんが、あの海彦山彦の山彦で、山彦の奥さんは海の神の姉娘でしょ。彼女は、豊玉姫は、産屋で龍蛇の正体を見あらわされて海に帰ってしまったが、生れた子の母親代りに、やっぱり龍蛇に相違ない妹を地上に送ってくる。この玉依姫が、のちに姉の子と夫婦になって産んだのが、あの神武天皇だよ」と、夢のなかで法子に『日本書記』の話をしてみせる。

冬子が高校一年生に入学したころ、安曇の家が滋賀から京都へ移ってきたことから地図で安曇川を発見、「長野県に同じ字であ、み郡があり」、安曇氏が「五世紀ごろから海人をひきいた著名な」「海人の首領」であり、また「伝説

上安曇氏が海神である豊玉彦命を祖先と仰ぐ事実」や「顔に入墨をする風習」があり、なかには「耳輪の風習」(三章)をもつ人々がいることを知った。

(注5)

戸井田道三は「鹿とひょうたん」のなかで、博多湾にある有名な金印の出た志賀の島について次のようなことを書いています。万葉の歌からも海人の拠点であったことが推定されること。金印の「漢の倭の奴の国王」の〈奴〉は博多の古名の〈那〉であること。志賀の神は海の神として尊崇されていたこと。志賀の島神社の鳥居をめぐると、第二の鳥居の「手前左側に志賀海神社宮司の阿曇氏の住宅がある。信州の安曇とは安と阿のちがいがあがあるが、おなじ苗字なのであろう」。また『日本書記』の応神天皇三年の条から見て「阿曇氏が海人の宰となつたことを示している。志賀島の阿曇氏は志賀海神社の宮司として、昔の海人の宰の面影をわずかに伝えているのであろうか」。また「琵琶湖の西側にある白鬚神社は猿田彦を祀るというが、その近くに安曇川というのがあった。読み方はちがうが、安曇と同じであつたらしいから、ここの猿田彦もただの気まぐれで建てたものではなく何か関連があるのであろう」と。

(注6)

同じ戸井田道三は「老後の初心」で次のように書いている。

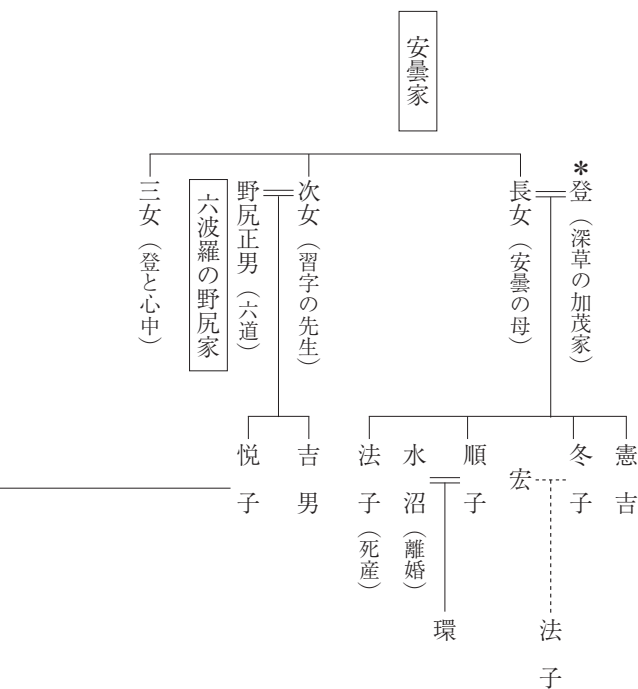
人はいつも由来をたずね、始原をめざしてものごとをわかつたとしてゐる。始原がわかれば、ものごとがわかると無意識のうちに思い込んでゐるかのようだ。それは自分が生まれたと思つてゐるからだ。

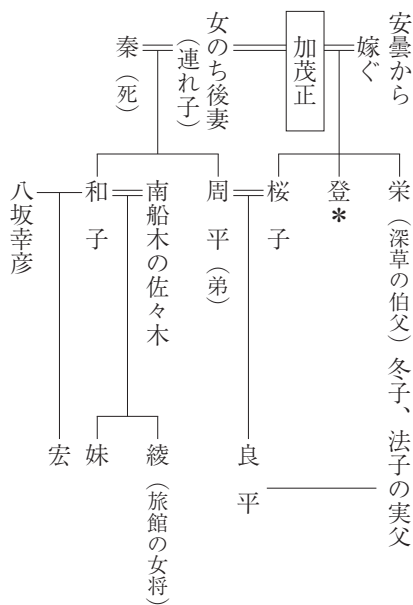
自分が生まれた以上、その由来や始原を知ろうとする。冬子も「こんな話かて、知つてたら、なにか言われた時にも、筋通した返事ができるし」(一章)と言うように、手や耳や生まれた土地を意識して早くから始原をもとめ、由来をさぐつてゐる。かつて、海人族のもつ天皇家の神話や伝承や系譜が藤原家の力によつて抹殺されたという説も

ある。^(注7) 物語の底辺に、海人族や安曇家などの膨大な歴史が横たわっているのは、死者を葬ることを家業とし、長年差別をうけてきた者の遠い歴史を通して、蛇のイメージに至る処に置き、忌み嫌われた歴史に光を当てることで、どうしようもない境遇に置かれた冬子の哀しみにふれるためであった。

作者はさらに複雑な系譜を用意している。来歴を語ることが幻想への手順ともなっているので、歴史という時の闇闇のなかから浮かびあがる幻像を見るかのようなのである。

(4) 人物相関図





(5) 同時代評から

野呂芳男は当時の書評で、^(注5)「人間の言葉や理性では、現実の奥底に流れるものを表現できはしないのであるから、本能的に古代人はそれを宗教神話で表した」として、次のように評した。

ロシアで庶民の手垢と接吻で黒光りしている正教会のイコンに惹かれる宏はまた、民衆の中に正教の浸透にも拘らず生きのびてきた蛇信仰の跡を見出す。日本も元来は蛇の国であった。読者はいつの間にか、著者にとって蛇

秦恒平『冬祭り』論（永栄）

は生死よりもっと深いところを流れる根源的なものを表していることに気付く。冬子も法子も蛇であり、そこからの再生である。宏の愛の物語は、現実の中から夢の中へと分け入り、現実と古代神話が表裏のように一つになる。

冬子が残して去ったホフマンの『黄金宝壺』（八章）のように蛇に純真な愛を貫いた物語もあるけれど、蛇は地上において忌み嫌われ身をかくすことが多い。それだけに民話や伝承では、畏怖され此の世から封じられ、退けるために崇められ祀られた気配がある。その姿に虐げられた人々を重ねることも可能であるが、野呂の言う「生死よりもっと深いところを流れる根源的なもの」という蛇とは何なのか。「生死」を日常世界と考えれば、「もっと深いところ」は非日常の異界であり、そこを「流れる根源的なもの」とは、もはや神話的あるいは宗教的意味をおびた存在に他ならず、さらに「言葉や理性」では表現できないものとは、口にすることさえ憚られる存在に対する本源的な畏怖や愛と言えようか。また「現実の奥底に流れるもの」も同様に、現実には表立って存在しえない禁忌の愛であろう。現実から追放された禁忌の存在として、限られた時間を懸命に生きる蛇として、夢幻の冬子はよみがえってくる。

冬子について、「妙に聡く、しんみり静かで優しく、そのくせ、不思議におそろしい」蛇の心象は日本の女に重なり、日本は蛇の国^(注9)という言葉すら出てくる。異形のものとして恐れられながらも崇められ、神つ代から現代に至るまでひとつの神である蛇の姿がしん、と浮かびあがってくるのである。それこそが冬子の姿でもある」と、より分かりやすく述べたのは荒瀬史^(注10)である。

また、安宅夏夫は異界の愛を明確にして「靈異との交歓シーンは多い」として「人間同志だと不可能事とも思われる願わしい至上の姿がそこにはある」と評し、異種婚姻譚の一つと見ている。同時に、主人公の作家としての生き方

に「自分の道をひた進む求道者としての相貌」をも読みとっている。この点は、冬子に対するおのれの生き方を厳しく批判していることも大きな問題の一つであるが、後にふれたい。

もつとも、「冬の京都を舞台にした、冬子たちとの短く、はかない、しかし生命の限りを尽しての愛の時が訪れ、非現実的なというより、幻想の出来事のような結末をもって終る」と評し、「習俗や伝承についての解説に努力を傾けているものの、それが人物の存在を内側から支える力になり得ているかと言え、議論があるだろう」と述べた中村昌義^(注1)の評もある。

(6) 冬子の出現

この物語の意図については、作中で披露されている。時間をめぐる作者の趣向があり、訪ソのあと、帰国してから原稿依頼がある、という時間の流れを作品は取り込んでいるので、読者はまだ書かれてもいないはずの作品を読みながら結末へ向かうことになる。下記の引用で、冬子との物語はまだ、終わっていないと書くのはそれ故である。

新聞連載の依頼が来たとき迷いなく引き受け、「冬子」を書きたい。が、冬子との物語は、まだ、終わっていない——
——と思ひ、「京都を舞台の恋愛もの」とはなにやら古めかしいが、同じ京都でも鴨川より東、いっそのましく鳥辺野一带にくり広げる話に」(十二章)と語っている。

——ありのままに日を追い、牧田氏の手紙に冬子の合図を見つけたところから描き出そう。旅をして、帰国して、そして今度のこの「提案」やこうした思案も、もう押し止められない物語の流れにとりこむことになるだろう。

現の人でない冬子と今日明日にも、どう成り行くか、作者自身が知らない話だ。

「人は、死んでから、生きるのえ……ほんまえ」と声高に叫んだ冬子よ、夕日が朱かった鳥辺の墓山に、きらめき躍っていた小鬼たちの、ちいさな首領よ。その生きの道づれと、俺を呼ぶがいい。誘うがいい——。(十二章)

帰国前、モスクワで牧田氏宅を訪れると「牧田夫人は、全然、冬子と別人であつた」。宏は「冬子はどう（いない）——という苦い断念に、きりきり苛まれた」（十章）。予定していたとはいえ、冬子の死という事実を知り、物語は転換点をむかえたはずだが、それでも冬子から電話がかかってくる。願望が作り出した夢のごとく、強引に読者を巻き込んで幻想の物語に踏みこんでゆく。幻想性を支えるのは、「過去、冬子の死を幾度びも想像し、大急ぎで回避した」が、いまは「死んでなお生きている死者、あの日本の葦原中国の死者、なのに違いない」（十一章）と、すすんで受け入れる宏のこころである。

「眼をとじ、冬子のことを思っていた。冬子は生きている。俺の、この胸に、熱く触れて物を言っている——」（十二章）。こうした感覚は、だれにでも覚えのあるものだろう。目を閉じ、恋した人を想起する、すると実在するかのように、脳裡によみがったその人は優しく語りかけ、おそらく事実以上に美しく映えている。宏が小説を書いている間、冬子は〈存在〉するのである。そうして作家生活を続けてきた。しかし、どう考えても、宏は死者の存在を感知し、呼び寄せる能力を人一倍もっているのではないかと思われるほど尋常なく敏感だ。つまり冬子に幻惑されるのではなく、宏も現実と幻想の境目を往来し、対応できる能力を備えているのではないか、冬子に近い存在ではないのか、と思えてくる。

冬子の出現の仕方は二種類ある。一つは、宏の冬子への愛が昂まったときである。宏のこころに応じるように、サ

インがあり影が立つ。つまり宏の愛の反映とも言えるのだが、もう一つは冬子からの呼びかけである。過去の不誠実を咎めるためか。いったい何を伝えに冬子は出現するのか。それを知るために、——すべて明らかにされてはいのだが、——まず、二人の間に起こった事柄を確認しておかなければならない。

最後に別れたのは、妻となる迪子が大学を卒業する日。迪子が一つ下、冬子が宏より二つ下だから冬子が大学三年のときである。そのとき「冬子は眼を光らせ、かけ寄ろうとすると、来るなど遠くから双の親指と人さし指を十手か二丁拳銃のように突きつけ、そむきざま人波にすばやく巻かれて行つた」（六章）。しかし事件はそのあと起こる。迪子が「ひと足早く東京へ二人の新居、アパート、の用意に渋谷代官山の兄の家へ発つた直後」である。見送る宏の背後から冬子が現れ、「来て、とさえ言わず、駅前から押すようにタクシーに乗せると、一直線に馬町の家へ走つた」（八章）。そこで初めて関係をもつのだが、そのとき「妻となる迪子を東京へ送りだした二十年前のあの夜、しなやかな冬子の青白い肢体は、のたを打って男の総身を絞つた。あんな凄いい声を自分ののが吐き出すとは——」（九章）。この、たった一度の行為から、宏はなにかを感じとつたはずである。つまり、異形の者の気配を察知したのではないかと思われる。結果、冬子は妊娠し、法子を産む。法子は二日半しか生きられず、「母親には、わたし、なりそこねたんですよ」「いいえ、死なせたのよ、わたし……あの子を、抱いても上げられなかった」（八章）と冬子は嘆く。その法子は順子の妹（死産）として用意されていた名前を安曇の祖母がつけたという。死者はいま成長して十九歳、幻覚の加賀法子となつて登場する。冬子が死んだこと、宏の子を産んで、その法子も死んだこと、こうした事情を宏は今まで知らなかったのである。冬子はそれを知らせに現れたとも言える。

さらに重要なのは、次の一節であろう。

二人が、昔も今も、口にしない言葉は——結婚。それを願わなかったとも、真剣に考えたとも言えはうそになる。結婚、の二字に酔いそうになると強いて頭をふった。卑怯のそしりに堪えても、未練な酔いは、力なく——醒まさねばならなかった。

「成るはなしやないで。わかつてるやろが……」と、ほかでもない野尻吉男がづらい顔をして背なかをこづいた。六道さんも、習字の先生も、似たことをそれとなく呟き聞かせていた気がする——。

身内——それは、冬子を妻とは呼ぶまい断念を埋めあわせる、苦しまぎれの愛の表白だった。その一方で早く、確実に、結婚の相手をべつに探さねばならぬ、と、大学に入った時分にはもう考えていた。(九章)

文面から見ると、初めて関係をもった時期と多少のタイムラグがあるが、それはさておき、「二人きりの他界に潜りで行けるかもしれない願いを、いつも二人はもっていた」と引用部分の直前にある。「成るはなしやないで」というのは、差別に関わる境遇で別れを強いられた二人、と解釈できる。だから彼らの願いは「二人きりの他界」へ、別世界で生きたいと願い、その先には心中へとも心が動いただろう。しかし宏が考え、実行するのは、身内という幻想に冬子への愛を封じ込め、結婚相手は別に探そうと決意することだった。冬子が問い糾したいのはその点であったにちがいない。なぜ結婚は叶わなかったのか。錯覚かもしれないが同族の思いを抱きながら、「他界」へ潜り行くこともできたであろうに、なぜ逃げたか。変わり身の早さよ。人は死んでから生きる、という叫びも、冬子の怨念の表出であつたのだろう。

愛し合う若い二人に立ちふさがる結婚の障壁。歴史が生み出した差別構造が彼らの運命を引き裂いた——しかしながら、ふと不審に思うところもある。宏の生い立ちには十四章に詳しいが、簡略に記すと、宏の母である和子、の母

は秦に嫁いで一男一女を産み、夫の死後二人をつれて深草の加茂の後妻に入った。和子は南舟木の佐々木に嫁ぎ、綾ともう一人妹を産んだが、昭和五年に夫と末娘を失くした。しかしやがて和子は身籠り、宏を出産。宏を深草の老母、義父に託して男（八坂）と行方を断った。宏は冬子の祖父が人を介して当尾家へ預けられた、とある。

本文を見ても、「六波羅の野尻でかて、馬町の安曇の家でかて、おにちゃんのことみんな、家のもんみたいに入れ入れてたん、なんでやテ」（十二章）と順子は言う。また、安曇家の神事（オコナイ）に宏が呼ばれていること（三章）、など考えると、本来、宏も安曇、野尻、加茂家の一族と見なされていたのではないか。貫い子も一族のなかでの計らいではなかったのか。では、結婚など「成るはなしじゃないで」と野尻吉男の言ったのは、何に照らした判断だろう。単に吉男や野尻夫妻が知らなかったとは考えにくい。冬子自身の特異性によるものなのか。

（7）宏の背信、作家の背理

それにしても、冬子を「身内」という「断念を埋め合わせする、苦しまぎれの愛の表白」の中に置き去りにして、冬子から去った宏の行為は「卑怯」である。元来、「身内」とは単なる血縁を拒絶し、他人、世間の掟に対して自分たちの世界をまもる愛の聖域を意味する、「貫い子」から発した渴望の意識であった。思えば、同質のことは「畜生塚」で町子にも強いていた。町子は、それが幻想にすぎないことを指摘していたが、この作品では、「その絶対共存不可能なはずの我ひとりの島に、気がつく」と他人と一緒に立っている。……立つことができている。その選びとった相手が身内なのね」と言う加賀法子に対して、「夢、だね。醒めればもとの孤りさ」（二章）と答えている。また、時間を「無際限にスライスの利く大きな球体」と捉え、「人の数だけの時間があって、親子であれ夫婦であれ、同じ時間を共

有はできなくて、錯覚の共有だけが可能なのだ、そこに「身内」同士の可能もまた錯覚される」（十五章）と述べて、身内意識が夢であり、錯覚であることを認めている。もちろん答えているのは、登場人物の作家秦恒平であって、身内の観念を幻想だと変容させなければ、冬子との愛をまもれなかった「苦しまぎれの愛」の宏は破綻するのだろうか。

いま、宏には、「妻に触れながら冬子を想えば一瞬に腕のなかへ冬子が来ていた」し、「瞬き一つのあいだに冬子もとの迪子に、法子が朝日子に、環が建日子にもどるのに継ぎ目というものが見えなかった」（十五章）と、幻想と現実がすり替わる現象が見えている。二重写しのように二つの世界が共存している。繰り返しになるが、本来なら遠いあの日、宏は冬子のなかに身内を見出し、「二人きりの他界」へ潜り抜けるべきだったのだ。だから作家となった今、当時の身勝手さを恥じ、心底からの深い悔恨とほげしい追慕が宏をおそうのである。

冬子が読めと言った『黄金宝壺』は、蛇の本であった。「だが心のどこかに、しょせん蛇はかなわないというすさまじい背信を、自分に指さして咎め苦しめる呪いのようでもあった」と感じる宏に、冬子は「アンゼルスほど純真に蛇の愛に生きようとしないう俗物を責めて、蔑んで、立ち去った」のだ。これは冬子の強い意思であった。その後、宏をずっと見ていた、という冬子は、宏が二人の愛を「永劫の一閃」とみなし、「遺書を書くぐあいに小説や随筆をいつも書いて」待っている姿を、「なるべく不意に、その来るのを」、「それで、なにかに對し、頭をさげたことにながっているみたい」（八章）と言う。それとは、死を意味するのだが、死にたいという願望ではない。書いているものが死を待っているように見える、いやそう思わせる狡猾さを見かねて冬子は現れたのだ。宏の奥底を流れるのは、虐げられた人々の歴史を考え、それを書く覚悟であり、冬子への贖罪でなければならなかった。

^(注12)
原善は冬子の出現の意図について正確に纏めている。

死ぬことで〈なにかに對し、頭をさげたことにしたがって〉いて〈遺書を書くぐあいに小説や隨筆をいつも書いて〉いく宏を〈卑怯〉とし、今・ここでの宏なりの決着に向けての〈提案〉をするが、それは『冬祭り』という冬子についての小説を宏が《書くこと》を通して〈よく虐げられてきた〉冬子たちの〈切ない歴史〉を記憶にとどめ、そんな〈あやまちの歴史を、どうか、繰り返さないで〉ほしいがためだと言う。宏にとつてはその今は、〈念々死去〉の覚悟という〈……考えることは変わっていないが、この数年、気持ちはずつとなさげなく、濁ってきてる。よごれてきてる〉という時期であり、冬子の〈提案〉は、〈執心を解き放ち、もつと自由になり、自分たち（冬子と法子）への負担を忘れ〉ることと解釈されることで、〈濁つた自分の浄化を意味することになる。

もつともこれは「今度こそ、あなたの胸の内に、安らかにあたしたちが棲めるお墓を、建てていただけるのですもの」（十六章）という安堵に基づくものであれ、執心を解き放ち、自由になって自分たちへの負担を忘れてほしい、とはずいぶん冬子は寛容に見える。しかし、「執心を解き放ち」の文に続く一節は見逃せない。「どう顔をそむけても耐えられずふくらむ眼尻の涙は、べつのことを言っていた」。べつのこと、とは何か。本当のところは、ともに「二人きりの他界へ潜り出ていける」（九章）願いを抱いていたと読むことができる。再来の意図は差別意識のゆがみを正すことだけではない。宏への愛なのである。それは二十年まえと変わっていない。それでも此の世にいられる時間に限りがある。命日の十一月二十三日がタイムリミットである。だから、その愛は、冬子の冬子たる所以である「蛇」の愛となって展開される。「生命の泉」を浴びて帰ってくると烈しく愛し合う。

冬子は凄まじく蒼白だったが、濃い瞳も、瞳を浮かべた白い眼も冴え冴え澄んで、男のからだを抱き締める腕

ちからには底しれない精気が籠っていた。思わずオウと応えた。「蛇ともなろう」と叫んでいた。冬子も叫び声をこらえなかった。男は炎を吐き女は満々と充ち溢れた。固く結んだ二た筋の緒と化して奥の奥まで肉を絡ませ血を求めあい、虚空を埋めて二人の息づかいは狭霧より濛々と渦巻き流れた。八度遂げた、まで、記憶がある――

(十六章)

作者は冬子の壮絶な「蛇」の性を描き出す。異形の者だからこそ得られる悦楽の性だろう。あなたも「とうとう蛇になったわ」とつぶやかれる宏も異界に通じる要素をもち、同じ世界に棲みたいと願う。もはや「もう……ヘタな理屈を言っでは生きのびるの、イヤだ」と心中へと心が動いている。

「あなた。あたしの……身内ね」

「そうだ」

「あたしが、もし、ご一緒にあの池の底へとお願いしたら」

「行く」

「ほんとね……。ありがとう。でも、いけませんよ。ぜったい、それはいけないのよ」(十六章)

稚児ヶ池を見下しながら、しかし冬子は宏を拒絶する。冬子の脳裡に、かつての父と安曇の母の末妹との心中事件がよみがえっていたのかもしれない。「その順子の妹の法子が、日の目を見ず常世の闇に流れ去った日、父親は清閑寺の奥山に忍んで心中死していた」、相手は「遠からず嫁入りの話もまともとしていた義妹、安曇家の末娘だった。

六波羅の野尻へ嫁いだ叔母から六つ若い、三人姉妹で一等綺麗だった叔母が、冬子や順子の父を追われに烈しい死へと底昏いあの山路に誘いこんだ（十二章）。その父は冬子の実父ではない、死んだ法子とともに本当の父は、父の兄（深草の伯父）であった。ということは、安曇の父母ともにそれぞれ不倫な関係をもっていたことになるのだろう。そうした振れた血縁のなかで生まれ育った冬子は、習字教室で「死んだ人はしやわせです」と書いた。逆に「死なれた者はたまらない——つまり、こういうことを冬子は言いたかった、のか」（一章）と宏は考える。同様の心情が、宏の家族を思いやる気持ちだが、冬子との心中を（宏の自殺を）思い止まらせた、と言えるかもしれない。

それとも、この幻の冬子は、宏が発見まえに観た歌舞伎「道成寺」の安珍・清姫さながら、蛇体となって愛をもとめて再来したのか。そしてはたして念願だった「生き直し」（死に直し）はできたのか。再び現実にもどって生き直したいという、かつて若くして失った人生を、十分生きられなかった怨念を浄化して、冬子は異界へと帰ってゆくのだろうか。あるいはまた、かつて宏に身内という觀念に封じ込められた怨念は、最後に宏の願望を置き去りにして去ってゆくと解釈すべきだろうか。作品はいろいろ想像させるのだが、作者は、冬子の「提案」が、「此の世で、よわく虐げられきた切ない歴史を、いいえあやまちの歴史を、どうか、くりかえさないで」という「抗議」であったことを明確にして、わが子法子の、一緒に生きたいとする願望に応えようとする宏を冬子に拒絶させる。

「そんなって、それならお父さん。あたしたちと一緒に来てくださる気……」

「…行くよ…法子。行くとも」

「それはダメ」

冬子の声が火花をふいた。（十六章）

「冬子……愛していたんだおまえを」

そう囁き、法子にも手を添えさせ、かさなる大きな蓮の葉のかげへ、あえかなあえかに冬子の命をかえしてやった。(十六章)

作者は、おのれの定めを知った冬子を描いている。宿命の愛を全うして異界にもどって行く姿を描く筆致はやさしく哀しい。

さて、異界への道を断たれた宏はどのように生きたのであろうか。そもそも、冬子がいっ、どこで、どのように死んだのか不明である。法子を出産後、「父親はだれか冬子は言わなかったが察しのつかぬ者は一人もいなかった」(九章)のに、宏が詰問された事実はない。「卑怯のそしりに堪えても」とあるが宏の覚悟を語るもので、事実は無認され、一族のなかで不問に付されたということだろう。しかし、そうした寛容ゆえに、「冬子との結婚を「蛇」に重ねて尻込みしつづけた、あんな思いの根は真実抜けたのか」(十六章)と、作者は差別の意識構造を宏に問い、作家としての覚悟をせまらなければならない。

幻の冬子と法子と三人で、琵琶湖を見ようと比良山に登る途中、宏は考える。

うそのように明るい日ざしに包まれている母と子を、目前に、ただ眺めていた。

自分ががまんならぬいやな男である自覚が、シブるほどに下腹を痛ませる。だが、彼女らのうえにそんないやな男で自分がありえた事実が、十年の作家生活をともしられ可能にしたと言えなくないのなら、作家なんていったい何だというのだろう。(略)——泣く母と娘をまえに、結局自分のことしか考えない男がここにいて、その男

といえ——念々に死去の夢を見ている、人生に希望というものをじつは微塵も持ったことのない一匹の死ぬべき虫にひとしいことを、冬子たちは悟っていなかった。(十四章)(下線部・引用者)

冬子たちにとって「いやな男」でありえたことが「作家生活をともしあれ可能にした」。冬子の愛を犠牲にして作家生活が成りたっている。これは冬子に対する譴責感であると同時に精一杯の言い訳である。もちろん苦悩ではあろうけれど、作家であり続けるためには、身勝手な「いやな男」でいなければならなかった背理をひけらかし、「人生に希望というものをじつは微塵も持ったことのない一匹の死ぬべき虫にひとしい」とまで白々しく言っている宏を、作者が「冬子たちは悟っていなかった」と記するのは当然である。宏の生き方の密度は、冬子たちの、未来を持たない冬子たちの、過去の愛と怨念に生きる密度にとうてい及ばないと断じたのだ。そこに、先に引いた安宅夏夫の「自分の道をひた進む求道者としての相貌」が見えると思えば、宏を「がまんならぬいやな男」として描かざるをえない作家としての苦悩であろう。作者はここで、あえて、深層では宏もまた冬子や蛇や異界に通じる異能者である可能性を語ることによって、差別者でもあり被差別者でもありうることを示唆したのである。

(8) 生き恥にふれて

この複雑で深淵な物語は、ごく表層だけとことわって原善は次のように要約している。

主人公はかつて自ら遠ざかった幼馴染みの女性に憧れと思慕を抱きつつ中年になったが、当の女性は死亡してお

り、それを彼は知らなかった。しかし、彼女は幽霊あるいは化身として彼の前に出現し、逢瀬を重ねるうちに妻子も命も捨てて彼女とともに行く（逝こう）と決心する彼を拒んで彼女は姿を消す（再度死ぬ）。

作者は、この物語を書くにおよんで、主人公を当尾宏（ペンネーム・秦恒平）とし、宏⇨秦恒平の行動や思想を作者が物語するという二重のフィルターをかける趣向をこらしている。その中で作者は宏に潜む差別者としての意識を剔出し、いくぶん異界に通じる能力など持たせて、異界との交歓を可能にもしている。だが、作者の知っている情報をすべて宏⇨秦恒平に表示するわけではないので、読者にはやや不透明な部分も生じてくる。

複雑な安曇の家系では、安曇の父（加茂家の登）は、妻の末妹と心中した。安曇の母は結婚する前から登の兄の栄を愛していて、実際冬子と法子（死産）を産んでいるらしい。その母は「死んだものの眼に、今生きている自分の逐一が見られているという自覚を指さして、即ち「生き恥」と思い屈していた」という。死者を「終始を胸に抱いて」生きなければならぬ母を見て、「死者は、生者の記憶の中でこそ死後を生きる、生きられる……とでも」（五章）と、宏と順子は話し合うのだが、「最期を看取った娘の勸では、安曇の母の例の「生き恥」という表現には、ただ死なれたただけですまされない、死ぬべきでない人を死なせたといった、たまらない自責の念が感じられた」という。兄弟（夫登と伯父栄）二人に愛された母の自責とは、夫の兄（伯父）との関係を、そしてそういう関係を続けたことを夫に詫げる意味であろうし、それが直接の誘因となって夫の心中事件が起こり、結局兄弟二人とも死なしてしまった。夫登の心中は冬子、法子の生まれたことに起因するのであるが、一方、栄はそのため責められて自死を選んだ可能性も考えられるが、詳しくは語られない。

そして同じような構図が順子と宏にも展開される。冬子は宏との間に法子を産んだが、宏はその咎は受けなかった。

「そやネ。そやッて、あたしらも生き恥をかいてるのやね」

順子は堪らなくつらそうに、関口台の叔母、「お兄ちゃんの叔父さん」と結婚した桜子叔母から、東京での縁談に返事を急かされていることを打明けた。

「順……どうなっても、きみは、きみだよ俺の」

順子は小指のさきで涙をはじいて、寂しそうに微笑むだけだった。（十五章）

「お兄ちゃんの叔父さん」とは母和子の弟周平をさすのだが、それより宏が冬子と順子姉妹に愛された事実を語っている。「生き恥をかいてる」というのは、二人の関係を冬子に見られているということだ。では、順子の子、環は宏の子かと邪推もされる。このような瑣末なことにこだわるのは、かつて「或る雲隠れ考」^{（注13）}のなかで、繰り返される不倫から生まれる子を「ちゃんとした」生まれでない子と記し、呪わしい血縁の輪廻について、このように書いているからである。

結婚できなかった男と女の苦痛に較べると、同じ二人から漏れ出来た子どもの心やそういう親と子の関わりの方に遥かに苦い毒の味が残る。そうではないか、人間の血が濃く粘って濁り始めたのはこうした親と子の余儀ない定めが性懲りもなく反復されたからだ。

冬子は、父の登と深草の伯父栄が兄弟で安曇の母を愛したように、宏のことを冬子と順子ふたりで愛してしまった運命を話す。長男の憲吉から冬子、順子、法子と四人兄妹だが、冬子と末の妹だけは父親がちがうと告白する。その

ため、父たちは悲慘な結末を迎えたが、宏には「この人を、万一にも死なさんように」と頼み、順子には「早まったこと、して欲しない」と言う。「もつと……氣もちも……もつと自由でいてほしいの」（十五章）と願う。自由に、とは血縁にとらわれず自在に、心のびやかに、自分を責めずに、汚れた血縁の輪廻などとは無縁に生きてほしいということだろう。こうした点からも冬子の怨念は浄化されていることを窺わせる。というのは、作者には、不倫の子は生存を許されない傾向が見られたのだが（冬子や法子や宏の子の法子などの死が証左となる）、環は蝮指をもつ安曇家の唯一の後継者と見なされているところから、「ちゃんとした」生まれの子なのであろう。しかし、この後、順子が桜子叔母のすすめる縁談を受け入れるとすれば、歪んだ血縁がまた始まるかもしれないと冬子は案じている。結婚できなかった二人（宏と順子）の関係のゆくえを案じるのだ。また、異能の者という点から見ると、冬子と法子がそうであり、憲吉、順子はそうでないなら、異能の系譜はそのルーツとして伯父栄がもつと問われねばならないはずだが、記述は少ない。もつとも、加茂家は安曇家から嫁をもらったと書かれているから、栄は登同様、安曇家の血縁を受け継いでいるかと納得がいく。では、同じ母から生まれながら、この異父姉妹（冬子と順子）がちがう能力をもつのはなぜか、明確ではない。

（9）掌編「金」について

最後に、モスクワで会った冬子が、宏がレニングラードからグルジア共和国への小旅行をする間、毎日、掌編を書いてくれるよう頼む。宏は「木」「金」「土」「日」「月」「火」「水」の七編を書くのだが、そのうち「金」について考えてみたい。

この掌編は、「鯛」として『閨秀』（昭和四八・一二 中央公論社）に収められた一編「蝶」と関わりがある。「蝶」の概要を記すと、「夕日のさいごの一しずくを受けた」少女が、黄金の粒から縫い針を作り、刺繍をはじめ。布地には滲てしない月夜の海がひろがり、小舟と少女は寂しい月夜の底を流れる。やがて黄金の針を波間に垂れると、波の下から蝶があらわれ夜空に舞いあがり無数の蝶が大空に架け橋を懸ける。少女は月にむかつて登っていくが橋は途絶える。足をかけると蝶はたちまち死んで落ちてゆくのである。それでも波間をのがれ出た一匹の蝶があり、「黄金の蝶は少女を乗せ、滲てしない空の涯てへ、ゆらりと翔び立った」。

これは、少女の孤独を救って他界へと向かう蝶の話と読めるのだが、掌編「金」はそっくり続編のかたちで加筆され、物語として変容している。すなわち、蝶が言う。

わたしは日の神の末の子、怒りに触れ久しく海の底に逐われていたのを、おまえに救われた。おまえが、あやまたず日の神に御手に、その、黄金の針と化した一しずくの光を無事戻してくれようなら、わたしはゆるされ、おまえはわたしの妻となつて、望みの場所で幸せな一生を過ごすことができる。（九章）

奈落を出た少女と蝶は飛び続ける。そして「一刹那、あかい光の矢が少女の眉間を射抜く、と見る間に少女は黄金の針を、炎える焰の芯へ、ちくりと刺した」。すると、闇の呪縛を解かれて「少女は一人の満月のような青年と並んで、なつかしい草野の原に立っていた」のである。闇の世界から日の世界への転身（蘇り）という結末に、宏は意識的に、冬子との関係に希望を見出そうとしている様子が見て取れる。

兄の海幸彦から借りた釣り針をさがして海神の宮にやってきて豊玉姫に出会う、山幸彦の神話など連想させる話だ

が、日の世界と闇の世界がはっきり区分されて、「海の底」は海人族、安曇家の祖先に通じる。掌編「月」にも、波を割って海の中から登場する兄妹があり、「男はハヤト、女はアヅミと名のつて、子孫を殖やし、アマ舟は、白銀の月のしずくに身を洗いながら、島から島、浦から浦へ漕ぎ渡った」と描かれている。原善の指摘のように、一連の掌編は「宏の無意識を掘り起こして冬子＝蛇の化身と気づかせる役目」があるのだろう、また古代からの冬子の深く遠い来歴を示したものと考えてよいが、毎日書き続けた七つの掌編のなかで上述のような結末を描いたことは重要である。

冬子が蛇の化身であることに尻込みし、現実では結婚することに抵抗を感じていたのに、幻想のなかでは心中もできると言う宏の身勝手さのなかに差別構造を描き出した「いやな男」宏の言い分は作者には苦々しかったはずである。そして物語は冬子が異界へ消滅することと終わるが、また宏の心中への願望は拒否されたが、作者には冬子がいつの日か日の世界にもどってくることを願う自由が許されている。〈冬子と宏の物語〉を書く作家秦恒平の世界、を物語る作者という二重のフィルターがかけられている、と述べた所以である。

いつか夢なら覚める、幻想なら現実にもどる、とわかっているが、ただ夢の一瞬を永遠に生きるために、作者は書き続けなければならない。たとえ冬子は死んでいようと、書いている間は、よみがえり、ともに存在できる。それが〈書く〉という作家の救いであり幸福なのである。

注

注1 自筆年譜（『四度の瀧』 一九八五・一 珠心書肆 所収）

注2 「早春」（『湖（うみ）の本』 44 早春・京のちえ』 二〇〇〇・八）

注3 梅原猛『京都発見 地霊鎮魂』（一九九七・一 新潮社）

- 注4 『湖の本24 冬祭り 下』（一九九二・一一）
- 注5 戸井田道三「鹿とひょうたん」（戸井田道三の本4 まなざし）（一九九三・一〇 筑摩書房）
- 注6 戸井田道三「老後の初心」（戸井田道三の本3 みぶり）（一九九三・六 筑摩書房）
- 注7 深田浩市『天皇の秘宝』（二〇二〇・一一 鳥影社）
- 注8 野呂芳男「冬祭り 哀しくも愛しい物語」（『東京新聞』夕刊 昭和五六・六・二九）
- 注9 荒瀬史「うつくしき蛇の葬礼 『冬祭り』 秦恒平著」（『幻想文学』昭和五七・四）
- 注10 安宅夏夫「秦恒平著 冬祭り 豊かな物語孕む長編」（『週刊読書人』昭和五六・七・二〇）
- 注11 中村昌義「秦恒平著 冬祭り たまゆらの生の時を描き」（『日本読書新聞』昭和五六・八・二四）
- 注12 原善「冬祭り」（『秦恒平の文学——夢のまた夢』（一九九四・一一 右文書院）。以下、原氏の引用はすべて同書に拠る。
- 注13 「或る雲隠れ考」（『新潮』昭和四四・六）。なお、拙論「秦恒平「或る雲隠れ考」——妖しい血縁の物語」（『皇學館論叢』第五十一巻第四号 平成三〇・八）を参照ください。

（ながえ ひろのぶ・近代文学研究家）